

# 「創造の場」4 類型による事例研究 —アート NPO BEPPU PROJECT の活動

学芸学部 ライフプランニング学科 萩原 雅也

**要旨：**近年、芸術文化の持つ創造性を都市再生につなげようとする創造都市論への関心が高まり、そのコアというべき概念である「創造の場」への注目が集まっている。本稿の主題は、別府市におけるアート NPO BEPPU PROJECT を中心とする実践事例を詳述したうえで、拙稿(2009)による「創造の場」4 類型にもとづいて実証的考察を加えることにある。これによって得られる結論は、この事例の創造的営為が「創造の場」に依拠しており、またその形成を意図した活動であること、4 類型が「創造の場」の基本的な分析フレームとして有効であるとの証左が得られることである。さらに、創造的営為には空間の大きさや開放性など多様なあり方を示す「創造の場」とその連鎖が必要であり、「創造の場」の形成のためにはアート NPO と行政等のネットワーク構築が重要であることが示唆される。

**キーワード：**都市再生、芸術文化、創造都市、「創造の場」、アート NPO

## 1. 先行研究と本稿の主題

### (1) 創造都市論と「創造の場」

近年、都市に蓄積されてきた芸術文化がもつ創造的な力についての関心が高まっている<sup>1)</sup>。その背景には、グローバル化や知識経済化の急速な進展のもとで、既存産業の停滞、雇用の減少、中心市街地の衰退といった都市問題、社会問題への不安が拡がり、これまでの地域経済のあり方や都市政策に対する疑念が強まっている一方で、「再生に成功している都市をよく観察するならば、芸術や文化が、創造的な産業の創出という産業的な側面だけでなく、教育、医療、福祉といったさまざまな分野と結びついて、あらゆる人々のエンパワーメントやコミュニティの再生に貢献している」<sup>2)</sup>という認識が広がっていることがある。

このような芸術文化の持つ創造性を都市再生につなげようとするのが創造都市論であり、今世紀に入って活発な議論が展開され、主要な都市論の一つとして定着している。創造都市とは、「市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような、『創造の場』に富んだ都市」<sup>3)</sup>と定義されている。

この定義によれば、「創造の場」は、今日の社会環

境の変化に伴うグローバル、ローカルな課題に柔軟に対応する「創造都市」を考察するうえでキーとなる概念であり、都市の創造性が発揮されるコアというべきものとして位置づけられる。「創造の場」は、野中郁次郎の知識創造企業論における「場」<sup>4)</sup>を批判的に検討した佐々木雅幸によって始めて提唱され、「住民の自発性や創造性を引き上げる」、「地域における創造的問題解決を行えるような」<sup>5)</sup>開かれたものとして構築された概念である。

この「創造の場」の事例の一つとしてあげられているのが、産業遺産として歴史的な価値を有する煉瓦造の紡績工場跡と倉庫群をリノベーションした施設である「金沢市民芸術村」である。そこでは、文化的価値を有する工場の空間が刺激となり、24 時間利用可能という条件や市民から選ばれたディレクターによる事業企画などの市民参画が施設を活性化し市民の創造的な活動が展開されている<sup>6)</sup>。また、同じく事例として、煙に汚れた重工業都市からの脱却を図るバーミンガム市のカスタード工場を「文化的インキュベーター」にリノベーションした都市再生プロジェクトでは、「芸術家相互または芸術家と一般市民との間の交流が刺激されることによって『創造的な場』が生まれる」<sup>7)</sup>ことが指摘されている。

このような創造都市論が着目する「創造の場」は、  
①NPO などで活動し芸術家と企業や市民を結びつけ

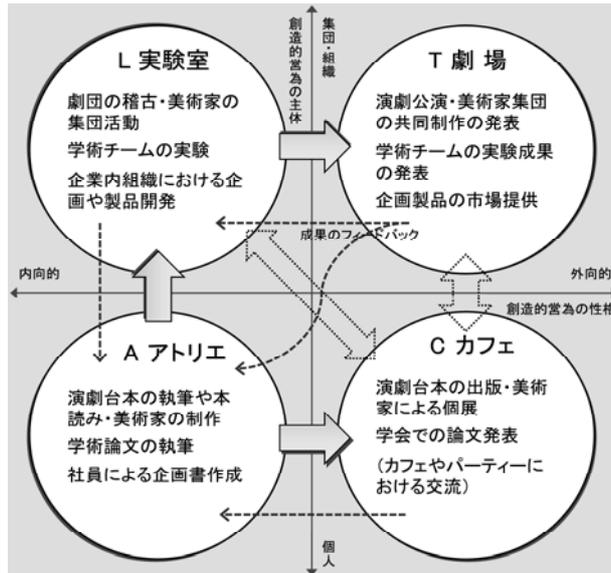


図1 「創造の場」の4類型

(出所) 萩原 (2009) p. 105 を一部修正

るコーディネーターの存在、②信頼関係に基づくネットワークの結び目の機能、③異文化との交流や伝統芸・芸能と現代のハイテクなどとの交流や出会いをおしすすめる機能の三つの要素からなる。その本質は、芸術文化と技術等他の領域とを結合し、あるいは異なる才能をみいだしてコーディネートする人の周りに形成されるヒューマンネットワークにあると考えられている<sup>8)</sup>。

「創造の場」は、芸術文化によって人の持つ創造性が刺激され、多様性にもとづく交流によってエンパワーされていく相互作用の時空間として概念化されている。そこには、人を惹きつけ、インスピレーションをもたらすスペースや雰囲気も重要であるが、物理的な空間に依存したのではなく、そこで展開される人々の活動によってはじめて成立する。「創造の場」は、芸術文化とそれ以外のものとの出会いの機会をもたらし、芸術文化をとおした関わり合いの中で認識の変容や新たな価値を創り出すことによって、地域の問題解決や新たな経済的、社会的価値を創出する一連の過程のプラットフォームとなると捉えられているのである。

## (2) 「創造の場」の4類型

この「創造の場」について、創造都市論の関係性にもとづく場概念を拡張し、個人の思索から、企業等の組織的活動、不特定多数の人が集まるパブリックな場まで含む幅広い創造的営為<sup>9)</sup>の場として捉え、それを包括的に位置づける理論構築をめざしたのが拙稿

(2009) である。

拙稿(2009)では、創造的営為を行う主体(個人⇔集団・組織)と創造的営為の性格(内向的(内面的)⇔外向的(社会的))という2つの指標によって「創造の場」を位置づけ、その場所が持つ空間のスケールと開放性の違いによって性格づけられる4つのカテゴリーに分類している(図1)。その第1は、個人が自らの内をみつめる内向的な活動を行う画家の創作、論文執筆のような「創造の場」であり、第2は、個人と個人が自らの内面を開き、アイデアを交換するカフェでの対話や学会での発表などの「創造の場」、第3は集団や組織がそのめざすものに向かって試行錯誤を重ねるダンスグループの稽古や科学実験などの「創造の場」、第4は集団や組織がその活動の成果を外に向かって発信し多数の人を巻き込む演奏・発表会、講演会のような「創造の場」の4つである。この4類型を、それぞれの代表的な場所の名をとって、A:アトリエ、C:カフェ、L:実験室、T:劇場と名付けている。

## (3) 本稿の主題

以上の先行研究のうえで、本稿の主題は、「創造の場」の事例を取り上げてその実践を詳述し、この4類型モデルによって実証的考察を加えることにある。それによって、事例の活動のなかに息づいている「創造の場」を定位し、どのような「創造の場」が創造的営為を可能にしているのか考察する。あわせて、この考察により4類型モデルが「創造の場」の研究に対して

有効であることの証左を得たい。

以下で取り上げる事例は、地方都市におけるアートNPO<sup>10)</sup>の活動事例である。地域課題でもあるまちなかの空き店舗をアートスペースとしてリノベーションし、これらを拠点としながら面的展開を図り、まちを舞台とするアートフェスティバルを実施している。この事例は、創造都市論が主張するように、NPOがコーディネーターとなって芸術文化、まちづくりに創造性をもたらしており、しかも創造的営為の継続的な発展過程を分析することが可能であると思われる。



図2 別府市中心市街地商店街の一角

(出所) 筆者作成

## 2. アートNPO BEPPU PROJECTの活動

BEPPU PROJECTは、国際的に活躍していたアーティスト山出淳也の主導により、大分県別府市で任意団体として2005年に創立され、2006年にNPO法人の認証を受けたアートNPOである。本節では、その活動の舞台となっている別府市の現状、BEPPU PROJECTの誕生からこれまでの経過とその成果、「創造の場」としての分析について記述する。

### (1) 別府市の現状と課題

大分県別府市は温泉湧出量、泉質数で日本一を誇り、世界的にも有数な温泉観光地である。まちなかと周辺に「別府八湯」と称される古くからの湯治場があり、北部の亀川、鉄輪などを含めて多くの宿泊施設、土産物店など商業施設が集積し、発展してきた。市街地にも豊富に湧く温泉は、地元住民にとっての日常生活の一部となっており、内風呂を持たずに、そのほとんどが100円以内で入浴できる近隣の共同温泉に通う人も多い。この「裸のつきあい」を中心とする濃密でやわらかな人のつながりは今日まで続く別府の生活文化ともなっているといわれている。

1906(明治39)年の合併により生まれた旧別府町の市街地を核として、現在のJR別府駅(明治44年開業)の南部に商業集積が進み、今日の中心市街地が形成されてきた。この中心市街地は第二次世界大戦の戦災を受けなかったことから、狭く入り組んだ路地や古い木造建築物、低層密集地区が今も残っている<sup>11)</sup>。

別府市の主要産業である観光は、昭和40年代には新婚旅行、昭和50年代までは修学旅行、社員旅行などの団体旅行・宿泊客によって隆盛を極めたが、その後宿泊客は減少の一途をたどっている。観光業の発展とともに増え続けていた別府市の人口も1980年代初めをピークに減少し続けている<sup>12)</sup>。かつては、まちなかの商店街は宿泊客が浴衣姿でそぞろ歩き、「眠ら

ない街」と呼ばれる歓楽街として賑わっていたが、現在では空き店舗が目立つようになっている(図2)。

この中心市街地の活性化を図るために2007年6月には「別府市中心市街地活性化協議会」(以下「活性化協議会」)が設置され、2008年7月には、まちなかの賑わい創出、まちなか観光の活性化、まちなか商業の活性化という3つの目標を掲げ、その事業の一部として空き店舗のリノベーションや別府現代芸術フェスティバル2009の開催が掲載された「別府市中心市街地活性化基本計画」(以下「活性化基本計画」)が国の認定を受けることとなった。

### (2) BEPPU PROJECTの歩み(表1)

大分県出身の山出は1990年代後半から国内で、2000年からは主に海外に拠点を移して、モノとしての作品ではなく、プロジェクトによる「リレーショナルアート(関係性の芸術)」と呼ばれる、アートを起点としてそれをみる人とのコミュニケーションの広がりによって主眼を置く作品を発表し続けていた。

2002年から2年間、山出は、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリで暮らしていたが、偶然インターネット上の別府のまちづくりに関する記事に眼をとめた。そして、ここにあった別府での新たなまちづくり活動に、自分が志向してきた国際的な展覧会を開くことができるのではないかと感じたのである。

2004年10月に帰国した後は、一人の知人を介して別府の人々や団体、組織との交流をはじめ、市民によってまちづくりを進めようとするNPOなどと対話を深め、協働を模索する。しかし、現代アートには全く馴染みがなく、そこで国際展をやることにどのような意味があり、別府に何が残るのか考えることになった。その結果、残るものは人々の経験であり、アートによって人や場所、街の歴史や時間をつなぐことに意味があ

表1 BEPPU PROJECT の歩み

年	月	主要プロジェクト等
2004	10	山出淳也フランスから帰国
2005	4	BEPPU PROJECT 任意団体として創立
2006	5	10日 BEPPU PROJECTがNPO法人の認証を受ける。
	10	30日 別府中心市街地活性化協議会設置準備会発足
2007	11	24～26日「全国アートNPOフォーラムin別府」開催。全国のアートNPO関係者にフェスティバル構想を発表する。
	6	8日 別府中心市街地活性化協議会設置
2008	10	27・28日 別府市中心市街地活性化国際シンポジウム「世界の温泉文化創造都市を目指して」開催。「星座型 面的アートコンプレックス構想」を発表する。
	7	9日 別府市中心市街地活性化基本計画が国の認定を受ける。これを受けて8月よりplatform設置事業を開始する。
2009	3	山出淳也 平成20年度芸術選奨文部科学大臣新人賞(芸術振興部門)受賞
	4	4月11日～6月14日 platformなどを会場とし、別府市街地全域にわたる別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」を開催する。
2010	3	1日『混浴温泉世界 場所とアートの魔術性』が出版される
		6～22日「BEPPU PROJECT 2010 アート、ダンス、建築、まち」開催。より日常的にアートを体験できるイベントとして市街地各所で開催する。
		23日 別府市 平成21年度の文化庁長官表彰(文化芸術創造都市部門)受賞
	11	1～30日「ベップ・アート・マンス2010」を開催。「混浴温泉世界」を契機に別府に生まれつつアートなど、44のアートプログラムを市内各所で実施する。

(出所) 筆者作成

ると考えるようになっていく。

2005年4月には山出を中心に有志が集い、別府での国際アートフェスティバル開催を目的として任意団体 BEPPU PROJECT が創立され、別府市内の施設での作品発表やトークショーなどを行う。2006年5月には特定非営利活動法人として認証され、同年11月には、全国のアート NPO 関係者が一堂に会する「全国アート NPO フォーラム」を主催し、国際アートフェスティバル構想を発表する。このような活動と並行して別府市、商工会議所、商店街振興組合などによる中心市街地活性化の取り組みが動き出し、山出も請われて「活性化協議会」に参画するようになる。

2007年には、「活性化協議会」と協働で、イギリス、フランスなど内外からパネリストを招いた「別府市中心市街地活性化国際シンポジウム」を開催する。ここで、山出は「星座型 面的アートコンプレックス構想」を発表するが、これにもとづく拠点形成が、2008年に「別府市活性化基本計画」の事業として承認され、空き店舗をリノベーションした platform (本節(5)で詳述)として実を結ぶことになる。

2009年には、創立当初からの目的であった「別府現代芸術フェスティバル 2009『混浴温泉世界』」(以下「混浴温泉世界」)が開催される。のべ65日間、別府市内約20カ所の会場でさまざまなアートイベントが展開され、9万人余りの観客を動員した<sup>13)</sup>。

2010年には、「混浴温泉世界」を契機に生まれつつある新たなアート活動を育て、より日常的なアートのあり方を模索しようとする「BEPPU PROJECT 2010 アート、ダンス、建築、まち」や「ベップ・アート・

マンス 2010」を開催し、次なるアートフェスティバルの方向も模索し続けている。

### (3)「混浴温泉世界」の開催とその成果

「混浴温泉世界」は、2009年4月11日から6月14日にわたって、別府市中心市街地に開設された platform01・02・04・05をはじめとする市内の約20カ所で開催された。国内外160組のアーティストが参加し、現代美術の国際展「アートゲート・クルーズ」、戦後すぐに建てられた古い木造アパートを会場とした若手アーティストの滞在制作による「わくわく混浴アパートメント」、コンテンポラリーダンスの発表「ベップダンス」、音楽「ベップオンガク」、トーク・シンポジウム、ワークショップなどの多彩なプログラムで実施された。

運営は地元団体、有識者らによる実行委員会を組織して行われ、BEPPU PROJECT が事務局を、山出は総合プロデューサーを務めた。「混浴温泉世界」という全体コンセプトは、総合ディレクターとなった芹沢高志によるものであり、大地に湧く温泉がすべての人にとってのいつきの時間を共有するところであり、緩やかな交流の結節点となっていることを意味している<sup>14)</sup>。運営費は、文化事業、観光や地域振興を対象とした助成金や補助金、地元企業からの協賛金、鑑賞チケットの販売によったが、基盤となる安定的な財源は確保されず、助成金の対象期間ごとの決算を行う手続きの煩雑さと資金不足に悩まされることとなった。

のべ65日間に及んだフェスティバルでは、フェリー

乗船場、公民館、共同浴場や商店街などさまざまな場所でプログラムが展開され、期間中の観客動員数はのべ約9万2000人、有料来場者による直接経済効果は4968万円余と推計されている。また、NHK教育テレビ「日曜美術館」をはじめとする全国紙、雑誌などメディアへの露出を広告に換算すると28億6987万円余になると試算されている<sup>15)</sup>。

多様な取り組みがあった中で注目すべきものの一つは「わくわく混浴アパートメント」である。これは、老朽化し使われなくなった木造アパートである「清島アパート」に若手アーティストが滞在し、共同生活、公開作品制作・展示を行うものであった。滞在期間は長短さまざまであったが、国内132人(組)の参加アーティストが寝食を共にし、互いに刺激しあう関係が生まれ、制作意欲も高まって数多くの作品が生まれ、会期中に5195人の来場者を集めた。生活費の限られたアーティスト達に対して、地域の方から食料の差し入れなどの協力があり、会期後には別府に移住し制作を続けるアーティストが現れ、地元との継続した関係つくられるなどの効果も生まれている<sup>16)</sup>。

また、「混浴温泉世界」では会場として使用されなかったが、2005年のアートイベントで使われたことのあるストリップ劇場「A級別府劇場」が2009年6月に閉鎖となり、同年秋からはBEPPU PROJECTが借り受け、活用策を探ることとなった。

「混浴温泉世界」では目的の一つに地域の将来を担う有為な人材を育成することが掲げられ、そのために開催準備期間を含め、運営に多くのボランティアの参加が進められた。ボランティア登録者は281人、居住地は別府市内と大分市内併せて約60%、同じく約60%が学生であり、その多くは立命館アジア太平洋大学(APU)や大分県立芸術短期大学の学生であった<sup>17)</sup>。これらの若いボランティアは会場設営や運営補助などさまざまな場面で活動したが、なかでも滞在作家の制作の補助、通訳などの参加アーティストへのサポートに大きな力を発揮した。

「混浴温泉世界」を訪れた人からは、フェスティバル全体のコンセプトや各イベント、作品の内容については肯定的な意見、感想が多く寄せられ、今後の継続を望む声も少なくなった。しかし、財政面を含む運営のあり方や地元への広報、周知などマネジメントの面では問題も多く、地域の団体との連携強化、安定的財源の確保、まちの再生への関わり方の明確化などの課題が残されることとなった。

#### (4)「混浴温泉世界」以後の展開の模索

2009年の「混浴温泉世界」の実現は、山出とBEPPU PROJECTにとって一つの区切りとなった。2010年は、「混浴温泉世界」に残された課題の解決の方向を探り、2012年に予定される次回への展望を開くために小規模なアートイベントを連続して行っている。

2010年3月6日から22日にわたって開催された「BEPPU PROJECT 2010 アート・ダンス・建築・まち」は中心市街地に会場をしばり、別府の裏路地散策と市民参加型のアートの融合を試みたものである。BEPPU PROJECTと文化庁が主催し、前年と同じく山出が総合プロデューサー、芹沢が総合ディレクターを務めた。8組の現代美術アーティストがまちに滞在し、地域の人々を行うワークショップと作品展示、旅館「山田別荘」を使った市民参加によるダンス・パフォーマンス、建築家集団による旧A級別府劇場のリノベーション計画の発表展示と実施などが行われ、鑑賞者がそれらを回遊するように仕掛けられた。ボランティアは各会場を案内するとともに地域の歴史や施設、まちを紹介するコンシェルジュと位置づけられた。各会場の入場料や協力店で飲食にも使えるクーポン型チケットBP(6枚綴り500円)も試験的に導入された。会期をとおした観客動員数は7312人、有料来場者による直接的経済波及効果は1064万円余、各種メディアへ掲載記事の広告換算は7454万円余、APUと大分県立芸術短大などの学生、社会人ボランティアは70人と報告されている<sup>18)</sup>。

2010年11月1日～30日は「ベップ・アート・ダンス2010」が開催されている。別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」実行委員会が主催し、広くこの期間に行われるアートイベントや展覧会、活動を公募し、プログラムとしてまとめている。platform02を会場とした大分県にゆかりのある若手作家による「BEPPU ART AWARD 2010」の作品展示、「清島アパート」居住アーティストによる「わくわく清島オープンルーム」など前衛的なアートから生活文化まで44のプログラムが実施された。クーポン型チケットBPも再度導入された。

このプログラムの一つとして開催された11月3日から7日まで5日間にわたる「混浴温泉世界シンポジウム」は、2009年の成果を振り返り、さらに2012年に向けてのコンセプトを参加者とともに設計することをめざしたものである。また、「蔵ギャラリーしばた」や「ギャラリーおおの」というこれまでBEPPU

PROJECT とは疎遠だった地元の画廊などの展覧会が参加していることが注目される。

#### (5) platform へのリノベーションとその概要

これまでのまちなかでの活動の核となり、「混浴温泉世界」をはじめとするアートイベントの拠点となっているのが、既にふれた中心市街地に点在する 8 つの platform と清島アパート、永久別府劇場（旧 A 級別府劇場）である（図 3）。

山出によって 2007 年の国際シンポジウムで発表された「星座型 面的アートコンプレックス構想」は、まちなかに点在する温泉湯とそこにおけるコミュニケーションやつきあいという別府の町湯文化を下敷きとしたものであり、中心市街地に生まれ続ける空き店舗をさまざまなアートスペース、コミュニティスペースにリノベーションし、それらを回遊する仕掛けをつくり出すことによって、あたかも星を星座とするように拠点を面に拡げていこうとするものであった<sup>19)</sup>。この構想には、アートスペースでのアーティスト・イン・レジデンス、スタジオ機能を持つ小劇場、商店街の 2 階を学生の下宿スペースとして貸し出すという構想も含まれており、その後の清島アパートや永久別府劇場での展開を予告するものとなっている。

この構想は、2008 年 7 月に認定された「活性化基本計画」の「中心市街地リノベーション事業」として実現した。BEPPU PROJECT はこの基本計画づくりの作業部会に参画し、構想づくりから具体的事業実施までに関わっている。リノベーション費用は市予算であるが、伝統的建築の保存をめざす NPO 法人別府八湯トラストの調査をベースとして対象となる空き店舗をあげ、家主との交渉、賃貸契約、改装デザイン、工事監督などのプロセスを BEPPU PROJECT が全てコーディネートしているのである。

この事業過程で注目されるのは、どのような空き店舗を選ぶかというコンセプトと場所の使用権のルール化である。まず、複合的な機能を盛り込めることをリノベーション物件の選定の一つのコンセプトとしている。具体的には、パブリックスペースとなる 1 階部分だけではなく、アーティストが滞在し制作できるプライベートスペースとして 2 階以上を利用できることを重視し、一体化した活用を探ることである。

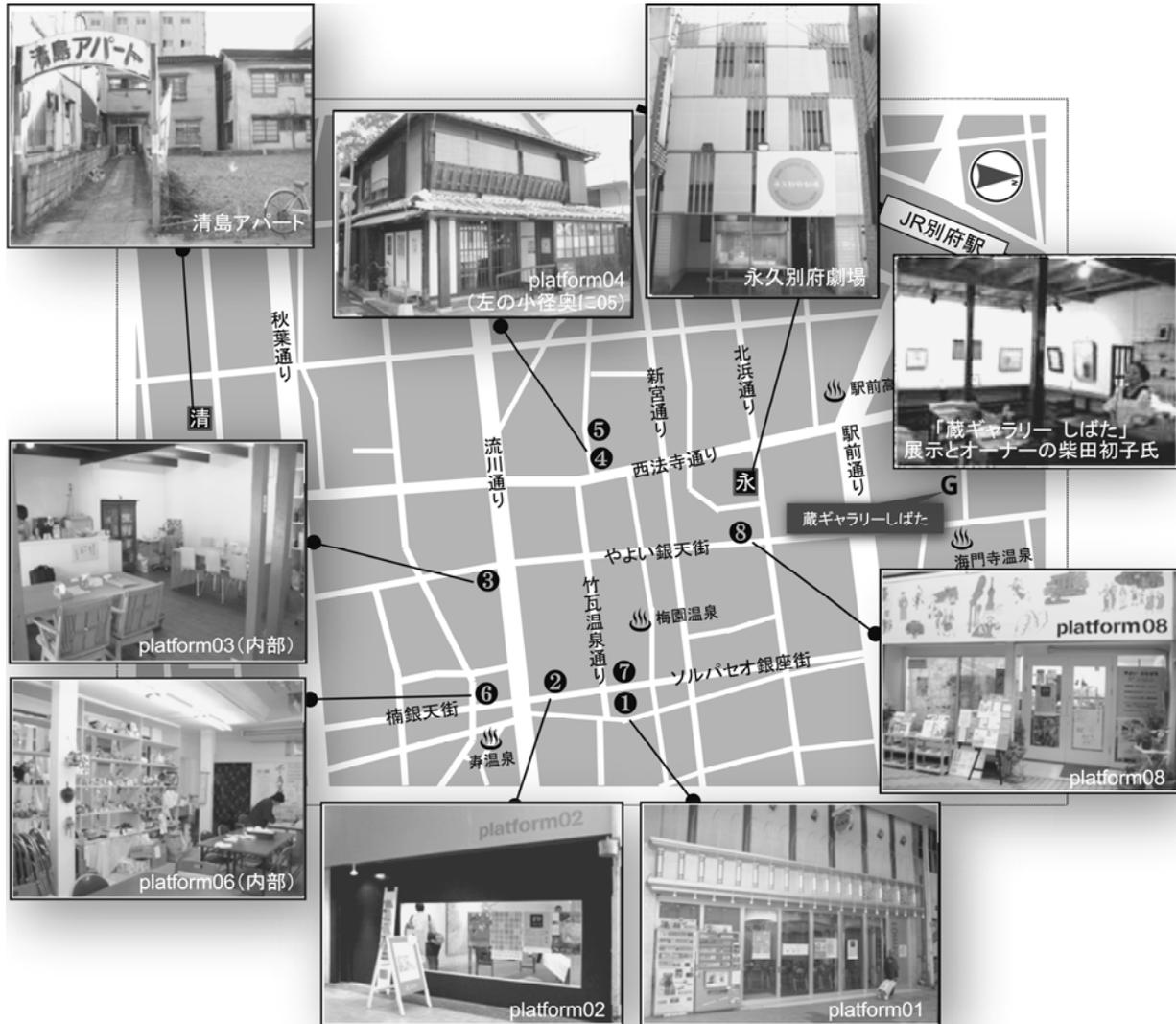
もう一つは、場所の所有者、賃貸者、使用者を区別し、それを契約関係として明示できるようにすることである。リノベーションされた platform は、所有者が「活性化協議会」と賃貸契約を締結し、同協議会を

とおして市から賃貸料を受け取り、さらに借り手である協議会が、BEPPU PROJECT などと使用契約を結んで場所の使用を認めるという 3 段階の権利委譲によって運営されている。この契約書はすべて BEPPU PROJECT が作成しており、山出には、面倒な手続きを伴う賃貸借ではなく、場所の使用権それだけを切り離して契約できるようにすることで、建物の持ち主と使いたい人との隙間を埋め、新しい空間利用が実現しやすい条件を整え、空き店舗などの遊休施設の活用と制作場所を求める若手アーティストへの支援を進めたいという企図があるのである。

#### (6) 活動についての小括—アートイベント、アートスペースから面的展開へ

platform で常にアートイベントが行われ、そこに関わる人や鑑賞する人々がまちを行き交い、拠点が線としてつながり、周囲にある交流、商業スペースが活性化するというのが「星座型 面的アートコンプレックス構想」の描く方向性であった。その後の「混浴温泉世界」や清島アパートの展開などを経て、現在ではこの「星座型構想」に加えて「アーティスト・ビレッジ」構想（市街地の空き店舗などをアーティスト等の居住スペースとして整備、運営）と「混浴温泉世界」（市街地全体で 3 年に一度開催する芸術フェスティバル）を含む 3 構想を事業の柱とするものへと広がり、発展している。この「星座型 面的アートコンプレックス」構想の拠点となるものの一つが永久別府劇場であり、「アーティスト・ビレッジ」構想のモデルとなるのが清島アパートとなり、3 つをつなぐ核となるのが platform と位置づけられている。

上記の 3 つの柱による構想は、これまで活動の集大成であり、BEPPU PROJECT が積み重ねてきた経験を昇華したものであるといえるが、このまち全体を巻き込んだ展開を進めるためには別府にある既存組織や住民との連携が欠かせない。既に 2009 年の「混浴温泉世界」実施に向けて、BEPPU PROJECT が創立された当初から、山出は別府の市民、NPO、行政部局、商工会などとの対話を重ねてきた。別府市が声をかけて生まれたまちづくりグループのネットワークである「泉都（せんと）まちづくりネットワーク」にも加入し、交流会へも積極的に参加してきた<sup>20)</sup>。2010 年 1 月には、交流会の会場として platform01 を提供し、空き店舗のリノベーションについても紹介した。このような地道な取り組みが「混浴温泉世界」をはじめとするアートイベントの実現の影の力となって



記号	名称・内容	説明
①	platform01 アールスペース	アーケード商店街の元土産物店をリノベーション。BEPPU PROJECT がダンスや演劇の練習・公演、集会や講座などの多目的に使用している。レンタルも実施している。
②	platform02 アートギャラリー	アーケード商店街の空き店舗をリノベーション。BEPPU PROJECT が、1階を現代アートの作品展示・制作、2階から上を滞在スペースとして使用している。レンタルも実施している。
③	platform03 アールスペース	角地に位置する空き店舗をリノベーション。立命館アジア太平洋大学 (APU) が地域交流スペース APU さくらまちラボとして交流カフェ、大学・学生の学習の拠点として使用している。
④	platform04 ブックカフェ	木造長屋を大学との協働により耐震性も備えて改造。BEPPU PROJECT が、1階は本の展示とカフェ、2階和室をマイケル・リンの絵が描かれたふすまの常設展示場所として使用している。
⑤	platform05 アールスペース	platform 04 の軒続きの長屋の一軒を余り手を加えずにリノベーション。BEPPU PROJECT が作家の滞在制作、作品展示の場所として使用している。
⑥	platform06 三世交流サロン	アーケード商店街の空き店舗をリノベーション。市老人クラブ連合会が手作り作品の展示販売や手づくり教室などを開催し、三世交流スペースとして使用している。
⑦	platform07 別府竹細工職人工房	アーケード商店街の空き店舗をリノベーション。別府竹製品協同組合が、別府の特産品である竹細工制作を見学し、身近に作品に接することができる場所として使用している。
⑧	platform08 platform 情報発信スペース	アーケード商店街の空き店舗をあまり手を加えずにリノベーション。NPO 法人八湯オンパク等の NPO が事務所として使用し、platform の案内や報発信拠点として活用している。
清	清島アパート アーティスト滞在制作スペース	家主から古い木造アパート全体を提供され、BEPPU PROJECT が運営し、アーティストの滞在制作場所、展示スペースとして活用している。
永	永久別府劇場 パフォーミングアールスペース	BEPPU PROJECT が運営。廃業したストリップ劇場をパフォーミングアールの発表スペースとして試行的に活用しながら、並行して建築家との協働でリフォームを進めている。

(出所) 筆者作成

きたのは間違いない。

ほとんど馴染みのなかった別府という土地で、なぜアートイベントが受け入れられ実現することができたのか、山出はそれも別府という地域の持つ文化のおかげであるという。近代になって温泉街として発展してきた別府では地域の行事、イベントの多くが長い歴史をもたないため、排他的な組織や運営方法をもっていないことが多い。「ポッと出てくるのがイベントなので、だから逆にわかりやすい」<sup>21)</sup>ものとして「混浴温泉世界」や BEPPU PROJECT の構想を受け入れやすい素地が別府にはあったと考えられるのである。観光客や湯治客という外部の人を常にターゲットとしてきた地域の産業や人々の生活のあり方もそれを助けたように思われる。

しかし、「混浴温泉世界」には、以前から別府にあった美術団体や関係者は、ほとんど参加していなかった。地域に根ざして活動してきた作家たちは、外部からもたらされたイベントを遠巻きにして眺めていたのである。このことには、山出も気づいており、「ベップ・アート・マンス 2010」では、さまざまところでアートイベントの登録を呼びかけ、登録希望が寄せられたプログラムに組み込むという方法をとった。これによって、20年以上別府のまちなかでギャラリーを営み、platform に顔を見せない地元作家のたまり場でもある「蔵ギャラリー しばた」(前掲図3 右上)などの参加があったことは一つの成果であったといえるだろう。だが、作家同士の交流や面的展開には至っておらず、今後の課題として残されている。

創立から今日まで BEPPU PROJECT の歩みを振り返ると、実験的なアートイベント主導のものから持続的なアートスペース、滞在スペースづくりへ、さらにアートによる日常的なネットワーク形成、まちづくりへと拡充してきたとみることができる。

このように一見したところ、まちづくりのためにアートを利用するという方向に転移したように見える BEPPU PROJECT の活動だが、そのめざす方向は一貫してアートのための環境整備、アートをターゲットとする活動であり、決してアートを離れてきたわけではない。では、なぜこのように活動の内容が変化してきたのか。それはつまり、芸術的達成とまちづくりの方向性が相反するものではなく、一致するものであり、アート活動がまちづくりに寄与することが実感されてきたことを意味する。このアートの果たすべきまちづくりに向けた役割、アートにしかできない社会的機能は何であると考えられるのだろうか。それは、一

言でいえばアートの持つ触媒機能であり、アートと接することでしか学べない自由な発想やアートの見方である。

現代アートは、新奇で評価が定まらず、作品をつくり出したアーティストにさえ、それを鑑賞者がどのようにみて、受け取るのか決定できない。その価値が曖昧な存在であるからこそ、それに接することでもの見方が変わり、ものごとに捕らわれずに考えることができるように触発を受ける。「作品を持ってくるとか、アーティストを連れてくるとかいうことではなくて、ここに関わっていく人たちがもう少し、より自由な観点からまちをみていく、活動をはじめていくということが実は理想」<sup>22)</sup>なのである。このようなアートとまちづくりの交差点が生まれるためには、多くの人が日常的にさまざまなアートと接し、アーティストと交流する機会を豊富に持つことが必要であると考えられる。

また逆に、しばしば狭い考え方に陥りがちなアーティストにとっても、多様な価値観を持つ人と交流し、自分にはないものの見方、アートの受け止め方を知ることが重要である。まちなかでアートによる回遊、交流の面的展開が行われることは、「個人にとっての新しさ」に閉じこもらず、アートに縁遠かった人ともつながり、「社会にとっての新しさ」に向かうべきアートのためのものなのでもある。

### 3. 「創造の場」としての分析

#### (1) BEPPU PROJECT の活動の「創造の場」

本項では、BEPPU PROJECT の活動について「創造の場」4 類型モデルによってさらに検討を加える。

BEPPU PROJECT の代表者である山出は、国際アートフェスティバルの開催をめざして別府において活動を始めた当初から、まちづくり NPO などの連携、協働を模索してきた。市民、行政部局、商工会などともさまざまな対話、交流を重ね、まちづくりグループの集う「泉都まちづくりネットワーク」にも加入し、交流関係をつくりながら、国際アートフェスティバルという目標に向かってきた。このような努力によって培われた地元のネットワークは、たとえ表面には出てこないものであっても「混浴温泉世界」等の推進を支える大きな要素となってきた。

このようなインフォーマルな交流に対し、フォーマルな協議の場である「活性化協議会」は、別府のまちなかの再生を進めるための大きな力を持つ組織であり、

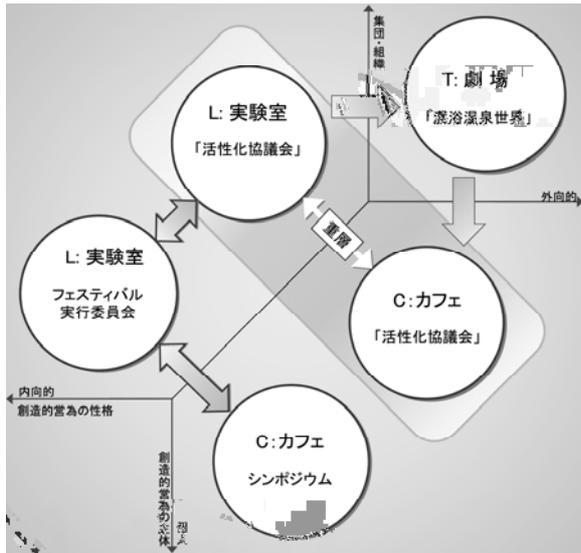


図4 BEPPU PROJECTの活動の「創造の場」

(出所) 筆者作成

これに BEPPU PROJECT が参画できるようになったことは大きな意味があった。

「活性化協議会」は NPO 法人別府八湯トラスト、商工会議所、商店街振興組合等を主要構成メンバーとする組織であり、法規にもとづいて中心市街地活性化という目的に向かい、協議を行う L：実験室としての「創造の場」とみることができる（図4）。

ここに参画した BEPPU PROJECT が持ち込んだものは、多くの会員がはじめて接する、新奇な現代アートによる国際アートフェスティバルの開催やアートの設置というインパクトのあるアイデアであった。このアイデアが認められ、BEPPU PROJECT と「活性化協議会」の主催によって「国際シンポジウム」が開催されると、温められてきたコンセプトは「星座型 面的アートコンプレックス構想」として発表され、続いて認定された「活性化基本計画」の空き店舗のリノベーションや現代芸術フェスティバルが事業の一部として組み込まれていく。

この過程で、「活性化協議会」を構成していた NPO や商工会等に対して現代アートに関する啓発が行われ、認識の変化をもたらすとともに、構想自体も別府の状況に対応するものとして鍛えられ、変化していくことになったのである。このような創造的営為が展開された「創造の場」として、まず、「活性化協議会」を捉えることができる。

2009 年の「混浴温泉世界」の実施にあたって、その推進組織となった「別府現代芸術フェスティバル 2009 実行委員会」には、商工会、商店街連合会、NPO

法人など「活性化協議会」構成団体の代表が委員として名を連ね、芹沢のコンセプトを実現する力となった。この実行委員会も「活性化協議会」と同様に L：実験室としての「創造の場」であったということができよう。

しかし、同時に「活性化協議会」の協議の過程は、BEPPU PROJECT を主体としてみていくこともできる。BEPPU PROJECT がそこに参画することによって別府の現状や温泉文化を学び、NPO や商工会という他者との関係を深めることによって、国際アートフェスティバルやアートのスペースのコンセプト、内容を実現可能なものに練りあげる機会を与えてくれた C：カフェとしての「創造の場」としても「活性化協議会」はあったのである。

これは、他のまちづくり NPO や商工会などの協議会構成員にとっても同様である。それぞれが主体としてこの場に参画し、他者から持ち込まれた新たな構想や事業のアイデアと出会い、集まった人との交流、対話を刺激としながら、自らが実現したいと考えている企画の具体化に向かう対話、交流の場として「活性化協議会」は機能している。「活性化協議会」は、そこに参画した組織にとっての C：カフェとしての「創造の場」でもあったのである。

このように「創造の場」としての「活性化協議会」は、「活性化基本計画」という共有された一つの目的に向かう組織ではあったが、階層化された意志決定機関としては強く機能せず、構成員と周辺にいる人や組織、外部とのつながりも保たれており、目的的な L：実験室としても、参画した人同士のフォーマルな交流、対話の C：カフェとしても存立し、この両面の機能を併せ持っていたと考える方が適切である。

さらに、次回「混浴温泉世界」に向かって、BEPPU PROJECT は「ベップ・アート・マンス 2010」でのシンポジウムなどを開催し、より多くの市民などを巻き込み、多様な人との交流、対話によってコンセプトづくりから進めようとしている。これは、「活性化協議会」に限られた構成員による閉じられた L：実験室としての「創造の場」であったのに対して、開かれた C：カフェとしての「創造の場」を BEPPU PROJECT 自らがつくり出し、ゆるやかな関係のもとで多様なアクターの参加を呼び込み、対話を進めることによって、「混浴温泉世界」に「新しさ」をもたらそうとしているとみることができる。

この一連の過程にみられるように BEPPU PROJECT は、C：カフェとしての「創造の場」において多様な

アクターとの対話・交流を進めて、活動のコンセプトを鍛え上げ、それと重なったL：実験室としての「創造の場」によって現実化している。この2つの「創造の場」で試練を受け、産出されたのが「混浴温泉世界」であり、最終的に別府という地域をフィールドとするT：劇場としての「創造の場」をとおして具現化される。このような4種類の「創造の場」の循環のなかにBEPPU PROJECTの構想は形となり、実現されているのである（前掲図4）。

## (2) BEPPU PROJECT がつくり出した「創造の場」

また、「混浴温泉世界」をはじめとするアートプロジェクトの拠点であり、中心市街地活性化のための回遊性回復の起点とされるアートスペースである platform、清島アパート、永久別府劇場は、BEPPU PROJECT がコーディネートして「創造の場」を意図的、持続的につくり出そうとする実践とみることができる。これらの「創造の場」における創造的営為の主体は、その場所を使用する人や団体、組織であり、それぞれが別府にある温泉文化、路地やレトロなまちなみなど、アートスペースや周辺環境が有している文化的資源、社会的資源を活用しながら活動している。

このようにアートスペースを「創造の場」として見た場合、空き店舗のリノベーションの過程で定式化された使用権は、「創造の場」における主体を明示し、確立する仕掛けであったと考えることができる。賃借料を負担している「活性化協議会」やコーディネーターとしての BEPPU PROJECT があいまいな立場のまま関与するのではなく、後ろに退き、使用する側のNPO、協同組合、アーティストなどの主体性を100%引き出すことによって、自由な創造的営為を十全に行うことができる場が生み出されるのである。

もう一つ注視すべきことは、platform、清島アパート、永久別府劇場というアートスペースは、「創造の場」の4種類のうち、それぞれC：カフェ、A：アトリエ、T：劇場という「創造の場」の性格、機能をもっていることである。BEPPU PROJECT はこれら3つにわたる「創造の場」を創出し、関連づけて運営することに成功しているのである（図5）。

地域の人たちにとって新奇な現代アートを身近なものとするための一つの方法として考えられるのは、一時的なイベントや美術館などパブリックで特別な場所だけではなく、日常のさまざまな場面でアートと出会うようにすることである。そのためには日々の暮らしの中でアーティストと出会い、ふれあえることが近

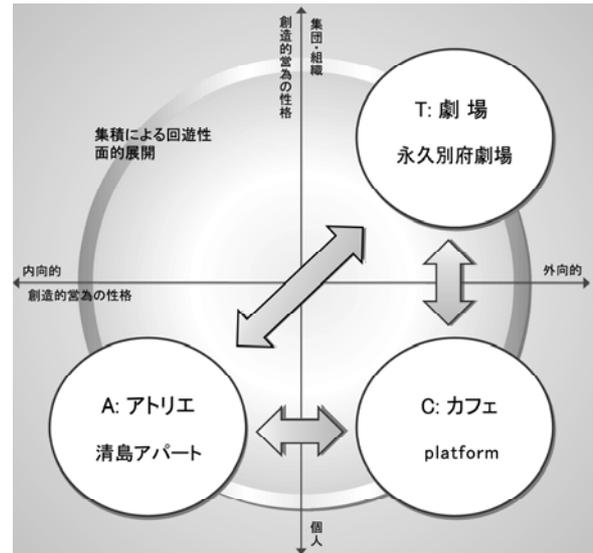


図5 BEPPU PROJECT がつくり出した「創造の場」

(出所) 筆者作成

道であろう。アーティスト・イン・レジデンスは、まちなかにアーティストが滞在し、普段はみることができないプライベートなA：アトリエとしての「創造の場」で展開されている制作の過程をも社会化する試みである。それによってアートを人々に近づけ、生活に身近なものにするとともに、さまざまな人の評価を受けることによって作品を「社会にとっての新しさ」を持つものに高めることができるという両面の効果がある。このための場所として設置されているのが清島アパートなのである。

このA：アトリエとしての清島アパートと、C：カフェとしてのplatform、T：劇場としての永久別府劇場という3つの「創造の場」がまちなかに集積し、創造的営為の多様なプロセスを垣間みせることによって、それを訪れる人々が現れ、回遊性が生まれ、商店街の活性化などの面的な展開につながると考えられているのが、「創造の場」4類型モデルをとおしてみた「星座的面的アートコンプレックス構想」であるといえることができる。

## (3) おわりにー「創造の場」形成に向けて

ここまでの考察によって、BEPPU PROJECTの創造的営為の中核に「創造の場」が存在することが理解された。また、「創造の場」の4類型にもとづく分析によって、創造的営為を構造的に把握し、その活動も、実施してきた事業においても「創造の場」に依拠し、「創造の場」形成を意図した活動であることが明らかになった。このことから、「創造の場」の4類型

モデルが「創造の場」の基本的な分析フレームとして有効であることは、実証されたといつてよいのではないだろうか。

さらに、本稿の最後に、ここまでの考察から示唆される「創造の場」形成のヒントについて若干の考察を加えてみたい。

BEPPU PROJECT の活動で明らかのように創造的営為には空間の大きさや開放性など多様なあり方を示す「創造の場」とその連鎖が必要であると思われる。芸術文化のための「創造の場」にもいくつかのタイプがあり、多様な創造的な活動を支え、促しているのである。

この異なったタイプの「創造の場」を近接した地域に創出するという点で、アートスペースへのリノベーションの対象となる空き店舗の選定に際して、1階をパブリックなC：カフェやT：劇場として開放し、2階以上をA：アトリエとできる物件を選ぶという考え方は興味深い。多様な「創造の場」を創出するという点でこれは有力なコンセプトになる可能性があると思われる。

しかしいずれにしても、「創造の場」は、参加者や活動内容によって、その空間や設備に求められる条件も異なり、規模の大きな劇場のように大きな投資が必要な場合もあれば、空き店舗のリノベーションのようにアートNPOが比較的小規模な投資によってつくることができるものもある。この小さく日常的な「創造の場」こそが、芸術文化と人々の間の垣根を取り除き、より多様な人々の参加を呼ぶこともあるだろう。

だが、資源の限られたアートNPOにすべての「創造の場」形成を担わせることはもちろん不可能である。多彩な人間関係を資源とし、柔軟な発想で活動を進めることのできるアートNPOと行政、企業等の地域にある主体がそれぞれの特性に応じた「創造の場」を形成し、必要な資源や情報を交換し合い、ネットワークを構築できるよう促進することが、今後重要なことであると思われる。

#### 【注】

- 1) たとえば2004年、ユネスコにより、文学、映画、デザインなど7つの分野から特色ある都市を認定するCreative Cities Network（創造都市ネットワーク）が創設され、世界中で29都市が認定（2011年8月現在）されている。
- 2) 後藤（2005）p. ii
- 3) 佐々木（2001）p. 42
- 4) 野中他（1999）によれば、「場（Ba、place）」とは、「共有された文脈—あるいは知識創造や活用、知識資産記憶の基盤（プラットフォーム）になるような物理的・仮想的・心的な場所を母体とする関係性」（野中他（1999）p. 161）である。
- 5) 佐々木（2001）p. 41
- 6) 佐々木（2001）
- 7) 川崎他（2002）p. 62
- 8) 佐々木（2001）pp. 215-217
- 9) 本稿では、形や表現となって具体的な所産が生まれる活動だけでなく、個人の内面におけるアイデアや想像という過程をも視野にいたれたものとして「創造的営為」ということばを使う。
- 10) アートNPOとは、ハイアートをはじめ芸能、生活文化など芸術文化に関わる幅広い活動をしているNPO（非営利組織）を指す（アートNPOリンク（2007）p. 14）。
- 11) 大分県別府市（2009）、株式会社日本政策投資銀行大分事務所（2010）による。
- 12) 別府市の人口は2011年8月現在120,163人であり、ピークである1981年5月の134,485人から、約1万4千人減少している（別府市HP）。
- 13) 会場での実数把握4万2000人、その他会場での推定観客数5万人である（別府現代芸術フェスティバル2009実行委員会事務局（2009））。
- 14) 芹沢による「混浴温泉世界」コンセプトは、「大地から湯が湧きだし、窪みに溜まる。それは誰のものでもない。人はそれを慈しみ、自発的に守り維持する。そして、ここに住む人も旅する人も、男も女も、服を脱ぎ、湯につかり、国籍も宗教も関係なく、武器も持たずに丸裸で、それぞれの人生のあるときを共有する。しかし、つかりつづければ頭がのぼせ、誰もそのままではいられない。入れ替わり湯から上がり、三々五々、ここを去っていく。人は必ずここを立ち去り、再び訪れる。ゆるやかな循環」（BEPPU PROJECT（2010c））である。
- 15) 別府現代芸術フェスティバル2009実行委員会事務局（2009）
- 16) 同上
- 17) 同上
- 18) 特定非営利活動法人BEPPU PROJECT（2010a）
- 19) 特定非営利活動法人BEPPU PROJECT（2010b）
- 20) 筆者による別府市ONSENツーリズム部観光まちづくり課への聞き取り調査（2010年9月）

- 21) 筆者による山出への聞き取り調査 (2010年9月)  
 22) 同上

**【引用文献】**

大分県別府市 (2009) 『別府市中心市街地活性化基本計画』 (第1回改訂版)  
 株式会社日本政策投資銀行大分事務所 (2010) 『現代アートと地域活性化～クリエイティブシティ別府の可能性～』  
 川崎賢一・佐々木雅幸・河島伸子 (2002) 『アーツ・マネジメント』 (財) 放送大学教育振興会  
 後藤和子 (2005) 『文化と都市の公共政策－創造的産業と新しい都市政策の構想』 有斐閣  
 後藤和子 (2006) 「創造性の三つのレベルと都市－欧州の動向を踏まえて」 (端信行ほか編著『都市空間を創造する』 日本経済評論社)  
 佐々木雅幸 (2001) 『創造都市への挑戦－産業と文化の息づく街へ』 岩波書店  
 特定非営利活動法人アートNPO リンク (2007) 『ARTS NPO DATABANK』

特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT (2010a) 『BEPPU PROJECT 2010 アート・ダンス・建築・まち 事業報告書』  
 特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT (2010b) 資料『観光資源としてのアート「別府市における芸術振興事業」』  
 特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT (2010c) 『混浴温泉世界 人と場所の魔術性』 河出書房新社  
 野中郁次郎・紺野登 (1999) 『知識経営のすすめ－ナレッジマネジメントとその時代』 筑摩書房  
 萩原雅也 (2009) 「『創造の場』についての理論的考察－『創造の場』の4類型と『創造の場』のシステムモデル－」 『創造都市研究』 第5巻第2号  
 別府現代芸術フェスティバル2009 実行委員会事務局 (2009) 『別府現代芸術フェスティバル2009 混浴温泉世界』 事業報告書』  
 別府市ホームページ：別府市の人口  
<http://www.city.beppu.oita.jp/03gyosei/jinko/index.html> (2011年9月20日最終確認)

**A Case Study Using the Concept Model of Four Categories of the Creative Milieu:  
 Cultural Activities of Arts NPO Beppu Project**

Faculty of Liberal Arts, Department of Life Planning  
 Masaya HAGIHARA

Abstract

In recent years, there has been growing interest in the concept of a creative city, in which the creativity of arts and culture is linked to urban development and regeneration. The creative milieu is the core concept of the creative city. The present paper details the cultural activities of arts NPO Beppu Project in Beppu City, Oita prefecture, and places the cultural activities into four categories within the framework of the creative milieu concept model of my previous paper ('A theoretical study on Creative Milieu', 2009). It is clear that the activities of the NPO Beppu Project are associated with the creative milieu. The four categories are found to provide an effective framework to analyze aspects of the creative milieu. To promote the various cultural activities and openness of space that are part of the creative milieu concept, collaboration among different partners creating the creative milieu is important. A network that connects governments and art NPOs is important for forming a creative milieu and creative cities.

Keywords: Urban regeneration, Arts and culture, Creative city, Creative milieu, Arts NPO